

精神科臨床のための必読100論文

11

Mahler, S. M., Pine, F., & Bergman, A.

乳幼児の心理的誕生－母子共生と個体化－

“The psychological birth of the human infant: Symbiosis and individuation”

Mahler, S. M., Pine, F., & Bergman, A.(1975). The psychological birth of the human infant: Symbiosis and individuation. Basic Books, New York.

(高橋雅士・織田正美・浜畑 紀訳：乳幼児の心理的誕生－母子共生と個体化－. 黎明書房,名古屋, 1981.)

<連絡先>

小林 隆児

勤務先：〒259-1193 神奈川県伊勢原市望星台

東海大学健康科学部社会福祉学科

TEL/FAX 0463-90-2034 (研究室直通)

TEL 0463-93-1121 (代表) 内線 4255

E-mail:ryuji@is.icc.u-tokai.ac.jp

Freud 以来しばらくの間、精神分析学は、成人の治療を通して語られてきた乳幼児期体験、つまりは再構成された乳幼児期をもとに、精神性的発達を構築されてきた。しかし、Mahler は、乳幼児期の子どもとその養育者を丁寧な観察方法で経時的に追跡することによって、実証的に乳幼児期の精神発達を描き出すことに成功した。彼女は最初小児科医として出発したこともあって、正常な子どもと病的な子ども双方を観察するという機会に恵まれていたことが、彼女の業績を単に精神分析学の領域のみならず、子どもの精神発達に関連する学際的領域において、大きな影響力をもつことにつながった。本書は彼女の業績の最も代表的な著作である。

書名に示されている「心理的誕生」とは、乳児期早期、最初は生理的活動を主体とした存在でしかなかった子どもが、母親との共生的な基盤の中で保護されながら、次第に養育者を中心とした他者の世界の中で安定した個人としての同一性を獲得していくことを意味している。生理的存在としてのヒトが心理的存在としての人間の同一性を獲得していく過程（それを分離－個体化過程 *separation-individuation process* と称している）を、直接観察の中から明らかにしたことは、その後 Mahler への多くの批判が生まれつつあるにもかかわらず、その意義は揺るぎないものとなっている。

本書で明らかにされた乳幼児の分離－個体化過程（それを彼女は4つの *sub-phase* に分けている）とその前段階としての自閉期と共生期の概略をここで述べておこう。

正常な自閉期 *the normal autistic phase*（生後数週間まで）：共生期の始まる生後数週間の間、新生児は、大半の時間で睡眠状態にあり、外界の刺激に対しても無関心であるようにみえる。

正常な共生期 *the normal symbiotic phase*：生後3～4週間目頃に、生理学的成熟の危機がおこり、外的刺激に対する感受性が非常に高まる。ここでの養育者の応答が乳児の緊張を緩和する助けとなるが、次第に養育者の存在、とりわけ人間の顔の形態に微笑反応を示し始める。このようにして生まれる乳児と養育者の相互交流によって、3ヶ月微笑（社会的微笑 *social smile*）が生まれてくる。この段階では、子どもは養育者の存在を自分とは別の存在としてではなく、両者が融合した存在、つまりふたりをひとつの単位 *dual unity* としてとらえることができる。

その後起こってくる分離・個体化過程を次の4つの時期に分けている。①分化期 *differentiation subphase*（生後5～10ヶ月）：母子の共生膜から子どもは「孵化 *hatching process*」することによって、次第に身体イメージが豊かになるとともに、最初は自己の内

部に、そして次第に能動的に外界の刺激に対する反応が強まっていく。知覚機能の成熟と分化が密接にからみながら、次第に乳児は自己と外界との分離の感覚、母親と他者との相違を体験していく。その端的な現れが生後6～7ヶ月における人見知り不安 **stranger anxiety** である。②練習期 **practicing subphase** (10～15ヶ月)：初期練習期 **the early practicing period** では、乳児は母親から身体的に距離を置きはじめ、身体的な分化が進行する。そして、自我の自律機能が急速に強まっていく。「心理的誕生」の発生として位置づけられた本来の練習期 **the practicing subphase proper** は、直立歩行の達成とともに開始される。自律性の高まりと直立歩行による対象世界の急速な広がりが、自己愛と対象愛の絶頂期をもたらすことになる。③再接近期 **the rapprochement subphase** (15～22ヶ月)：よちよち歩きながらも、世界の広がりが高揚感によって分離の感覚が高まっていくが、まもなくすると自分の存在の小ささや、いつも自分を助けてくれるとは限らない母親の存在に気づくようになり、ある種の分離不安が生じてくる。18ヶ月から24ヶ月にかけてこのような不安が最も強まり、子どもにとっては非常に困難に満ちた時期となる。これが「再接近期危機 **rapprochement crisis**」といわれ、乳幼児期の精神発達の中で最も危機的な段階であるとされている。④リビドー的对象恒常性の時期 **the phase of libidinal object constancy** (22～36ヶ月)：この段階では、愛する母親の存在が子どもの心に内在化されるとともに、自分という個別性に対する確固とした概念が形成される。

Mahler 自身、母子間の共生によってもたらされる融合体験と、母子分離に伴う自己実現欲求とのあいだでもたらされる葛藤は、人間の生涯における永続的な苦闘の源泉であると考へ、再接近期の発見の意義をそこに置いていた。この葛藤がどのようにして乗り越えられるか、その体験の質がその後の人格発達に決定的な影響を与えることを見出し、精神病のみならず境界例にみられる精神病理の成り立ちを理解する上で大きな貢献をした。

たしかに、幼児における再接近期が人間の内面に存在する両義的心性に伴う葛藤が最も顕著になる時期であることは確かであるが、人間は、生涯発達全般にわたって、この種の葛藤の連続の中で、生きぬかなければならない存在であるということがいえる。そのことは **Erikson** のライフサイクル論に端的に示されている。つまり、情緒社会的発達の過程において、人間の両義性にまつわる葛藤が、その時期の社会的文脈の中で様々に彩られながら内面化され、その時期に達成されるべき発達課題の克服となっていくのである。

さらに最近では、乳児期段階から、退行（後退）**regression** と進歩（前進）**progression** を円環的に繰り返しながら成長を繰り返していること、とりわけ心身の新たな再組織化が

もたらされる際には、両者の葛藤によって激しい退行と混乱が一時的にもたらされること (van de Rijt-Plooi, F. X. & Plooi, H. H., 1993)、愛着をめぐる動因的葛藤が自閉症 (Richer, J., 1993; 小林, 2000) や神経症的行動 (Fisher-Mamblona, H., 2000) の成因に深く関連していること、などが指摘されるようになってきた。

このような動向をみていくと、Mahler の業績は相対的に小さくなっていくようにもみえるが、最近の愛着研究や情緒発達に関する神経生物学の発展 (Schore, A. N., 1994) をみてみると、Mahler の仕事の確かさ、とりわけ再接近期の存在の意義を再確認することになりはしないかと、筆者には思えてくる。乳幼児と養育者との相互作用の直接観察にもとづく発見の確かさをわれわれは本書から学びとる必要がある。

<関連文献>

- 1) 小林隆児：自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—。ミネルヴァ書房，京都，2000.
- 2) Mahler, S. M.: On child psychosis and schizophrenia: Autistic and symbiotic infantile psychoses. *Psychoanal. Study Child*, 7; 286-305, 1952.
- 3) Mahler, S. M.: On human symbiosis and the vicissitudes of individuation: Infantile psychosis. International Universities Press, New York, 1968.
- 4) Pine, F.: *Developmental theory and clinical process*. Yale University Press, London, 1985. (斉藤久美子・水田一郎監訳：臨床過程と発達①、②。岩崎学術出版社，東京，1993.)
- 5) Schore, A. N.: *Affect regulation and the origin of the self: The neurobiology of emotional development*. Lawrence Erlbaum Associates Publishers, Hillsdale, 1994.